

## 発話行為の諸相に関する一考察

内田, 和夫  
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/3574>

---

出版情報 : 九州大学心理学研究. 5, pp.97-104, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# 発話行為の諸相に関する一考察

内田 和夫 九州大学大学院人間環境学府

## A study on the phases of palole

Kazuo Uchida (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this paper was to clarify the various phases of palole (utterance) in Japanese. A number of utterances in Japanese were classified from the viewpoint of the relationship between the speaker and the listener. As the result, they were divided into the vertical and the horizontal utterances, represented by a chart. The vertical utterances came into existence in the non-mutual relations, and the listener had no choice but only to listen or speak in chorus. The characteristics of the horizontal utterances were the mutuality and the equality between the speaker and the listener. Then, the next topic was to clear the details of differences between "hanashi" (talk) and "katari" (narration) which were both the horizontal utterances. As a result, it was found that "katari" had a pattern on the plot, rhythm, and so on. In contrast to "katari", one of the most obvious characteristics of "hanashi" was to talk freely. Finally, it was considered how these utterances were listened on the scene of clinical psychology. In conclusion, it was important to be aware of the differences and the mutuality of the phases of palole in the psychotherapy.

**Keywords:** phases of palole, hanashi (talk), katari (narration)

## 1. はじめに

言葉は人と人をつなぐ有力な手段である。とりわけ、直接的なコミュニケーションの主要な成分である発話行為の重要性は、言う、話す、語る、喋る、告げる、述(陳)べる、説くなど、その様相を表現する言葉が他のコミュニケーション行為に比べて各段に豊富であるという事実からも明らかである。

われわれの日常的な人間関係に、もっといえば生きるということに密接に結びついた発話行為は、専門的で特殊な人間関係であるところの心理臨床場面においてもやはり特別な意味を持つ。なかでも対話を主要な方法とするカウンセリング面接において発話行為の果たす役割は格別なものがある。カウンセリング面接においては実に様々な性質の発話行為が立ち現れ、そしてその内容とともに発話行為の様相が観察、研究されて、数多くの理論や技法が生み出されてきた。

ところで、こうした研究は主として事例研究という形で行われてきた。FreudやRogersをはじめとして、それぞれの学派の創始者は事例研究を用いて理論モデルを提示しているし(下山, 2000)、今日でも盛んに事例研究が行われて心理臨床学の発展に貢献している。その意義については星野(1970)や河合(1986)をはじめとして数多く議論されているとおり、事例研究が心理臨床という実践と学問に欠かすことの出来ない方法であることは間違いない。

さて、事例研究を行うにあたっては、その素材となる事例をいかに記述するかということが極めて重要となる。殊にクライアントおよびカウンセラーの発話行為をどのように記し表すかということは、その発話内容までも規定することになるため、おろそかにはできない。つまり、「クライアント(カウンセラー)は次のように話した」と記すのか、それとも「語った」と記すのか、そこには、言葉を、ひいては相手をいかに聞いたかということ、そして自身が何を考えて言葉を投げかけたかという書き手の理解や意図が反映される。しかし、これまでに発表された事例研究に目を通して見ても、発話行為をいかに記述するかということについて十分な配慮がされているのかどうか定かではないし、この問題に特別な関心が向けられて、研究したものも見当たらない。この問題について認識を深めることは、方法としての事例研究の質を高め、さらにはカウンセリング面接における多様な発話行為を聞き分け、理解するひとつの視点を提供することにもなるであろう。

そこで本稿は、まず日本語における発話行為の性質を分類、整理することから始めて、発話行為の諸相を明らかにすることを目的とする。さらにその上で、そのような発話行為の幾つかが、カウンセリング面接ないし心理臨床場面においてどのように立ち現われ、聞かれるのかという点について考察を試みる。

## II. 発話行為の主体と客体

発話行為の諸相を明らかにしていくにあたり、本節では日本語における発話行為の表し方の中でも代表的なものを列挙し、それぞれについて『広辞苑 第五版』(新村編, 1955)ならびに『岩波古語辞典』(大野ほか編, 1974)を参照しつつ簡単に整理することから始める。そしてその際に、発話行為は人が人に向けて行う行為であり、発話者と相手(聞き手)ないし主体と客体の関係を無視することはできないということを考慮して、主体と客体の関係の差異という観点から発話行為の種類を整理することを試みる。

それではまず、最も基本的なものとして「いう(言う, 云う)」を取り上げよう。この語は、必ずしも伝達を目的とはせず、発話行為を意味する諸語の中でも最も基本的な、声を出して言葉を口にするという表出作用そのものを意味する。したがって、文脈に応じてその意味にはいろいろなニュアンスが加わる。またこの語は、古くは噂や、動物が鳴くこと、さらには「である」という指定の助動詞に近い意味を示しもすることを考えると、必ずしもその行為の主体を限定しないという特徴がある。

それに比べると「はなす(話す, 咄す, 嘯す)」は、雑談する、言葉で伝えて広める、人と言葉を交わす、そして、相談するなど行為の主体と客体の関係が「いう」よりも明確である。ただし、「はなす」にはこのほかに、おしゃべりをする、口で述べる、語る、告げるなど、以下に取り上げる発話行為の多くを内包している。それゆえ「いう」に同じく文脈に応じてその意味にはいろいろなニュアンスを帯びる用途の広い包括的な語であり、したがって以下にみるような形で主体と客体の関係も文脈に応じて変化すると考えられる。

次に「かたる(語る)」であるが、「かたる」のカタはカタドリ(象)のカタ、型のカタと同根であり、出来事を模して言葉で相手にその一部始終を聞かせることが原義である。事柄や考えを言葉で順序立てて相手に伝えること、筋のある一連の話をするということのように、起承転結を典型とするような、話の内容に一定の順序とまとまりを有する。さらに、筋や抑揚をつけてよむ、朗読するように述べるなど、日常会話とは異なったある種のリズムを伴うようである。そして「語る」は「騙る」に通じ、後には特に人を欺いて仲間に入れようという意に限定して用いられるようにもなることや、親しくする、という意味が含まれることから考えて、主体と客体の関係は「はなす」にくらべて一層密接であるといえよう。

続いて、「しゃべる(喋る)」は、騒々しく話しまくる、べちゃくちゃ話すなど、「はなす」と重なる部分もあるが、特に口数の多さを強調した語である。さらに、話を他人に漏らすという意味があることや、「誰彼かまわず

しゃべる」という用い方をすることから考えると、相手を顧慮しない発話者本位の行為であること、あるいは客体を限定しないという特徴があるといえよう。

これとは逆に、客体を限定するものとしては「のべる(述べる, 陳べる)」がある。これは、言葉を連ねて言い表すことであり、言い訳をするという意味を含むように、相手を納得させるためになされる発話行為であって、その点で客体は限定される。そして、「のべる」以上に相手を納得させるという性格の強い語が「とく(説く)」である。これは「解く」と同源であり、道理をいささず、解説する、説明するという意味がある。「とく」は発話内容に論理性を有した行為であり、かつ相手の理解力まで考慮しなければならないという点で、主体は一層客体を意識し、限定する語であるといえよう。

「とく」は相手が分かっていないことを説明して教えることであり、理解の程度において同じ水準での対話ではなく、発話者は相手よりも上位にある。すなわちそこに主体と客体の上下関係を見て取ることができる。この主体と客体の上下関係という点では、「つげる(告げる)」も同様である。「つげる」は、伝え知らせること、教える、とく、ふれ示すことである。たとえば「癌の告知」という用い方にみられるように、知らない者に向けて知っている者が知らせることであって、ここにも主体と客体の間には確かな上下関係と一方向的な流れがある。

この主体と客体の上下関係という点では、日常的な語とはいえないものの、「のる(宣る, 告る, 罵る)」という語もそのひとつである。これは本来、神や天皇がその神聖にして犯すべからざる意向を人民に向けて表明するのが原義であるが、そこから転じて、みだりに口にしてはならないことをはっきりと表明するという意味がある。そこには神と人という明らかな上下関係があり、主体の発した言葉を客体は押し頂くだけである。しかもじかに言葉が伝えられることはまれで、神託や詔勅といった形で間に第三者(巫女や勅使)を介して伝えられる、あるいは特殊な状況(夢の中など)における行為である。

そして「のる」が神聖な存在からの一方向的な発話行為であるのに対して、「いのる(祈る, 禱る)」は、人が自分より上位に見立てた現前しない神聖な存在に向けて発する一方向的な発話行為である。「いのる」とは、神や仏の名を呼んで幸福を祈願することであり、そこから転じて、災いが起こるように祈願するという意味も含み、「のろう(呪う)」に通じる。「のる」や「いのる」は、神聖な存在と人との関係において神意や願いを帯びた強力な言葉が一方向的に発せられるもので、主体と客体の関係が隔絶し、直接的なコミュニケーションにおける発話行為とは性格を異にするものである。さらに、現前しない対象に向けて呪力を持った言葉を発するという点では、呪文や経文などを声高いう「となえる(唱える,

称える)」も同類であろう。ただし「となえる」には、人の先に立って主張する、称するといった意味もあり、「のる」や「いのる」に比べて言葉の向けられる先がはっきりしないという点で異なっている。

そして最後に、「うたう（歌う、謡う、唄う、謳う）」をあげておく。言葉に節づけして口にするという意味のほか、多くの人が一斉にうたう意から転じて、多くの人がほめたたえる、主張する、表明するという意味を含む。したがって「となえる」と重複する部分もあり、またリズムを伴うという点では「かたる」にも近い行為であるともいえよう。

### III. 垂直的な発話行為と水平的な発話行為

さて、敬語表現を加えるとさらにその表現の幅は広がるが、今回は基本的な語にとどめておく。ここでは、主体と客体の関係という観点から各種の発話行為について概観したが、これらはまだ並列的なものにとどまっている。これらを全体的な連関のなかで理解する上で有効な観点が、坂部（1989）の指摘する垂直的な発話行為と水平的な発話行為というものである。それによると、前節で主体と客体の上下関係の特徴とすると説明した「のる」と「つげる」は上方からの、「うたう」と「となえる」は下方からの、聞き手が一方的に聞き従うか唱和する以外には選択の余地をもたない垂直的な発話行為であり、その典型においては神仏と人の関係といった何らかの相互的ならざる関係において成り立つものである。これに対して、「はなす」と「かたる」は聞き手の自由な反応

と応答の余地を予想し、聞き手との相互的で平等な水平的な関係の特徴とする発話行為であり、原則として人が人に差し向ける営みである。そして、「かたる」ことが成立する場合は、下方から「うたう」や「となえる」に支えられ、上方から「のる」や「つげる」にまもられた中間的な場であり、そしてまた上方から充実し凝縮した沈黙としての「しじま」に支えられ、まもられ、下方を混沌とした単なる言葉の不在としての沈黙の奈落に接する中間的な場であるという。ちなみに、この中間的な場は「とく」や「のべる」が成立する場でもある。しかし、「かたる」や「はなす」が生産的構想力による意味成体の創出、統合、再生産にかかわるのに比べて、「とく」や「のべる」は既成の意味成体の基盤の存在を前提とした二次的な発話行為という意味合いを強く帯びているという。こうした坂部（1989）の議論に、「しゃべる」、「いのる」といった発話行為を加えて、前節で取り上げた各種の発話行為をもう一度整理すると、Fig.1のように表すことができるであろう。

Fig.1では楕円の内部に各種の発話行為を位置づけた。内側の円が一次的な発話行為を示し、その外側の部分が二次的な発話行為を示している。ちなみに、この一次的な発話行為と二次的な発話行為という区別は、Merleau-Ponty（1945）が、言語学者 Saussure における言語使用（parole）と言語体系（langue）との基本的区別から敷衍して述べた「語る言葉」（parole parlante）と「語られた言葉」（parole parlée）に対応するであろう。つまり、一次的な発話行為とは言葉の創造的、発見的な使用であり、「この行為のなかでこそ、まだ定式化されていない意味

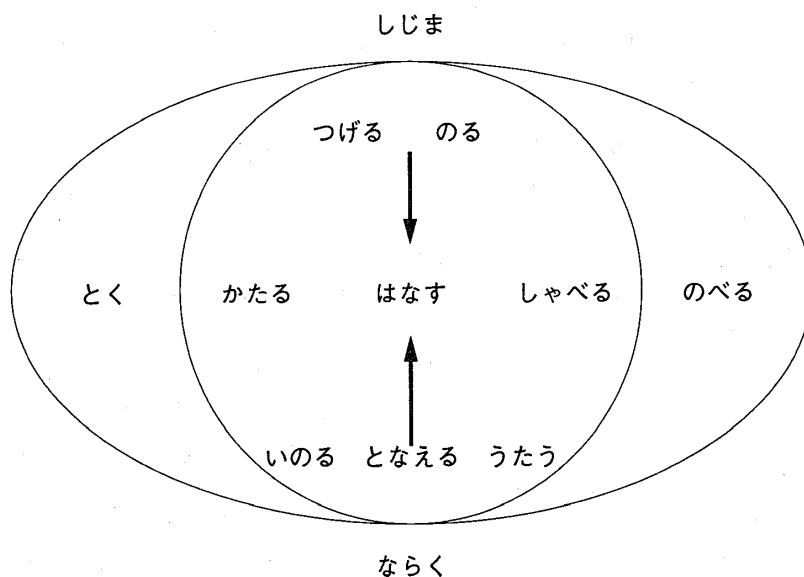


Fig.1 垂直的な発話行為と水平的な発話行為  
（坂部，1989を筆者なりに図示したもの）

が外部に表現される手段を見いだすだけではなく、またさらに対自的な存在ともなるのであり、真に意味として創造される」(Merleau-Ponty, 1945)。そして、二次的な発話行為は、一次的な発話行為によって生み出され、獲得された言葉によって可能となるような論弁的、解釈的な行為である。もっとも、こうした二次的な発話行為によって「真正な表現にぞくする他の諸行為—作家や芸術家やあるいは哲学者の行為—が可能になる」(Merleau-Ponty, 1945)のであって、一次的な発話行為に対して二次的な発話行為が「従属的な位置に甘んじることを意味するものではない」(坂部, 1989)。

さて、これらの発話行為は、「いう」によって表される、声を出して言葉を口にするという表出作用を、その性質によって様々に表現したものであって、それぞれは近接し、重なり合っている。そのためこれらの境界を明確に線引きすることは難しいが、それでも発話行為の諸相が明確になってきたといえよう。ただし、既にみたように「はなす」は包括的で用途の広い語であって、中でもおなじ水平的な発話行為である「かたる」とは重複する部分も多く、ここまでの議論では両者の差異についてはいまだ不明瞭な部分を残している。この点に関して、たとえば先述の坂部(1989)は、この二つの発話行為を比べた場合に、「はなす」の方がより素朴、直接的であり、それに対して「かたる」の方はより統合、反省、屈折の度合いが高いとして、両者の間に発話行為としてのレベルの差があることを指摘している。次節では、この他にも幾つかの議論を参照しながら「はなす」と「かたる」の差異について詳しく検討する。

なお、ここからは「はなす」と「かたる」に替えて「はなし」と「かたり」という表記を用いる。その理由は、第一に、そもそも動詞の基本形は連用形であり(大野ほか, 1974)、また連用形で表すことで名詞としても扱うことができるので、論述上都合がよいからである。そして第二に、これまでは特に行為の側面に焦点を当ててきたが、発話行為はやはりその内容と切り離すことができない。「はなす」と「かたる」が発話行為そのものを指すのに対して、「はなし」と「かたり」という表記は行為とともに内容をも示すものであり、後者を採用することでその両側面を含めた議論ができるからである。

#### IV. 「はなし」と「かたり」の差異

人と人との間で交わされる、相互的で水平的な発話行為であるという点で共通する性格を持つ「はなし」と「かたり」は、対話の形で行われるカウンセリング面接において生起する発話行為の代表的なものであるといえるが、両者の差異について心理臨床学の文脈の中ではほとんど言及されていない。この問題が議論されてきた

のは、主として国文学の領域においてであった。よってここでは、国文学という学問的には畑違いの領域における論稿を取り上げることになる。しかしながらそれでも、われわれの日々の心理臨床活動は国語としての日本語に支えられており、「精神療法の基礎科学としての国語発想論的研究」として北山(1983)が示したように、国語の研究に基づいた論考は心理臨床学の基礎固めとなりうるであろう。

そこでまず、「はなし」と「かたり」の差異について、『日本昔話事典』(稲田ほか編, 1977)では、この両者と「うた」とを対比させてそれぞれの特徴を簡潔に示している。これを取り上げることははじめてみよう。それによれば「うた」も「かたり」も、ある文句に節をつけて、決まった長さに切りながら、まとまった出来事を述べることである。ただし「うた」は抒情を中心にして、その文句は短く、節まわしがはやいものに対して、「かたり」は抒事を中心にして、その文句が長く、節まわしがゆるやかである。そして「はなし」は「かたり」と深くかわりあいながら、何よりもその場にふさわしく、一層自由にものを言うことを指しているという。

そもそも「はなし」は、室町時代から使われるようになった比較的新しい言葉で、元来「話」という漢字によって「かたり」を表していたのが、「咄」や「噺」をもって「はなし」を表すようになったとみられている。この「はなし」の語源が「放し」であることは広く支持されることである。三谷(1960)は、「はなし」の語源を「テバナシの意で、語り手に対しては聞き放しにすること」とし、「おしはなちて言う」(堤中納言物語)と「いと手放ちにて」(更級日記)という用例をあげて説明している。「放し」は遠ざけることを意味し、「おしはなちて言う」は、相手にもしないで突っぱねていうこと、相手が聞こうと聞かまいとお構いなく言うことである。そして「いと手放ちにて」は、「大変手を抜いて簡略に」という意味で、これらが合いの手も入れずに一方的に語る簡略な話法としての「はなし」に変じてくると説明している。こうしてみると、ある種の約束事や型のある「かたり」に対して、「はなし」は先に取り上げた「しゃべる」に近いものであって、その本来的な性格は、型にとらわれない自由な物言いにありといえよう。

松田(1978)によれば、「はなし」は、現在に密着して一回性の消費を期待し、新奇であること、面白いことを第一義としており、事実か虚構かは二義的であって信じられることを求めているという。一方、「かたり」は過去に密着し、伝承の連続性を期待し、かつ事実と虚構の両面を担いつつ真実と信を求め、聞き手を己の世界に巻き込む性格を持つという。そして、松田はさらに、「はなし」と「かたり」の差異を最も明瞭に示すものとして、延宝8年(1680)刊行の「噺物語」の序文から一

文を紹介している。以下に引用すると、

「物語せんと申さるる程に、耳を澄まし聞き居たれば、思ひの外の戯言なり。さやうの事を咄しとこそいふなれ。世の噂にも、まことしからぬ儀を人の語れば、それははなしにてぞあらめといふにても、弁へしられよかし。語(ものかたり)とは、出所正しき事をいふなるべし。」(括弧内筆者)

この引用文から「物語」すなわち「かたり」は、聞き手に「耳を澄まし」て聞くことを要求する行為であり、語り手と聞き手双方の真剣な態度によって成り立つ営みであると認識されていたことがうかがえる。三谷(1960)は、古くは「かたり」を聞く際に、相槌を打ち、合いの手を入れることが作法として厳重に守られていたと指摘している。つまり、「かたり」の成立のためには聞き手の側にもある種の約束事が課せられたのである。これは、松田の指摘する「かたり」の聞き手を己の世界に巻き込むという性格であり、先に考察したように、「はなし」よりも「かたり」は主体と客体の関係が一層密接であるということにも通じる。

さらに、この引用文においては、「はなし」は「戯言」であり、「出所正しき」ものである「かたり」よりも価値が低いとの認識があったこと、そして聞き手には「かたり」に対する期待があったことがうかがえる。これは、その場一回限りの「はなし」に対して、繰り返して語り継がれた「かたり」が「物語」としての歴史と芸術性を持つようになったことによるものと考えられる。竹取物語をはじめとする文字にして残された作品や、音楽と結びついて「うた」としての性格をも帯びた平家物語などはその好例である。また、たとえば、「わらいばなし」

や「ばかばなし」は通例であっても「わらえるかたり」や「ばかなかたり」という表現は一般的ではない。現代においても「はなし」よりも「かたり」の方が一段上の、真剣で、価値が高いものであるという認識が一般的なものであろう。こうした認識は、この引用文にもみられるように、聞き手の態度に影響する。それゆえ専門的な聞き手であるカウンセラーは、自身がどのような性質の発話行為に重きを置いて、期待しているのかということについて十分に留意しておくべきである。あるいはまた、カウンセリング面接においてある発話行為を「かたり」として記述した場合に、聞き手の側にあらかじめ何らかの期待(構え、型)がなかったかということ、そして聞き手が発話者の世界に巻き込まれていた可能性を考慮してみることは、面接過程を振り返る上で有益であるかもしれない。

さて、Table 1に示したように、ここまでの議論から「はなし」と「かたり」の差異が明らかになってきたといえよう。そして、「はなし」の由来が「聞き放しにすること」という聞き手の側にあるという説のあることや、「かたり」の成立に聞き手の真剣な態度が不可欠であるということから、発話行為は聞き手に支えられているという自明の事柄が改めて問題になってきた。そこで次に、カウンセリング面接ないし心理療法場面において、こうした「はなし」や「かたり」が専門的な聞き手を得て、どのように立ち現れ、展開するのかということについて若干の考察を試みる。

## V. 「はなし」と聞き手

古くから、耳を澄ました真剣な聞き手を得た「かたり」が繰り返して語り継がれる一方で、その場一回限りの「は

Table 1  
「はなし」と「かたり」の差異

	はなし	かたり
原義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハナシ(放し)</li> <li>・話し手に対して聞き放しにすること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カタドリ(象), カタ(型)</li> <li>・出来事を模して言葉で相手にその一部始終を聞かせること</li> </ul>
性格	<ul style="list-style-type: none"> <li>・型にとらわれない自由な物言い</li> <li>・その場一回限り</li> <li>・事実か虚構かは二義的</li> <li>・素朴, 直接的</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一定の順序や筋, リズムなどの型がある</li> <li>・繰り返し語り継がれる</li> <li>・真実と信を求め, 時に「騙り」に通じる</li> <li>・統合, 反省, 屈折の度合いが高い</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主に現在の出来事</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主に過去の出来事</li> </ul>
聞き手	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞き放し</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・耳を澄ます</li> <li>・合いの手を入れる</li> </ul>

なし」は聞き放しにされて言い捨てられてきたという歴史があるとしても、カウンセリング面接においては、おなじ「かたり」がそのままの形で繰り返されることはなく、そしてまたクライアントの「はなし」をすべて聞き放しにして忘れてしまうわけにもいかない。また、カウンセリング面接は、「はなし」や「かたり」の内容自体というよりも、話し手としてのクライアントを理解するという点に主眼を置いていること、非日常的で特殊な場における対話であることから、伝統的、日常的な「はなし」や「かたり」に直接対応する聞き方とはおのずと聞き方に違いが生じるであろう。

カウンセリング面接ないし心理療法場面において、型にとらわれない自由な物言いを特徴とする「はなし」の極は、自由連想法を用いた精神分析の治療場面における発話行為であるといえるかもしれない。これは被分析者がカウチに横になり、背後で分析者が聞いているという場において「何でも頭に浮かんだままに話す」というもので、被分析者は何でも話しかまわないという極めて自由な状況に置かれる。ただし、それは日常的に慣れ親しんだコミュニケーションの型から自由であると同時に、何でも話さなければならぬという不自由な状況に置かれることでもあり、その意味では型に縛られるともいえる。こうした状況と対比させてみると、日常的なコミュニケーションにおいて、われわれがいかにかに口にする言葉を選び、まとめているかということ、そして発話にまで至らずに済ませている事柄がいかにかに多いかということが分かる。

自由に話す被分析者に対して、聞き手としての分析者は、中立性を維持しつつ、被分析者の言葉には「差別なく平等に漂う注意」(Freud, 1912)を向けて、何かにとらわれることなく耳を傾ける。このときの、何かにとらわれることなく耳を傾けるという分析者の態度は、話し手の世界に巻き込まれていくような性質のものではなく、ある程度の距離を保った、どこか「聞き放し」に通じるもののようにも思われる。しかし、被分析者は頭に浮かんだことを逐一話すわけであるから、必ずしも筋のある「はなし」をするわけでもなく、むしろ時間的前後関係におかまいなしに話すことが多くなる。これに対して分析者は漫然と聞くのではなく、「あたかもストーリーを読むごとく」、「聞いたことを時間の中に配列し直して、それをストーリーとして聞かなければならない」(土居, 1992)とされる。つまり、次々に話されることを、筋立ててひとつのまとまりあるストーリーとして構成する役割は聞き手の分析者が果たすことになる。

さて、このような特殊な場において、やがて被分析者には、ある事柄については話せないというような抵抗が生じてきたり、分析者に対する特有の感情的反応としての転移が生じてくる。こうした抵抗や転移に対して、分

析者は、「何かを言うということは別の何かを言わないこと」(北山, 2003)であることを、すなわち「騙り」を意識しながら、ストーリーの中に欠落している部分としての言わないことや言えないことに注目し、あるいは被分析者が現在の体験として話していることを過去の体験が反復して語られていると見立てて、いわば「はなし」を「かたり」として聞こうとする。そうやって得られた理解をもとにして、分析者は、繰り返し解釈という合いの手を入れて無意識の意識化に努め、被分析者が自分を知り、より一層自由に話すことができるように援助する。そして抵抗や転移は繰り返し現れ、これに対して徹底操作という形で繰り返し解釈が伝えられて二者の対話が続いていくのである。

こうしてみると、自由な物言いを特徴とする「はなし」の一例として自由連想法を取り上げたが、その実は自由でありながら同時に不自由でもあり、過去と現在が入り混じり、姿を変え、そして主題が繰り返される。このことは「かたり」の特徴にも通じるものであり、先に述べた「はなし」が「かたり」と深くかかわりあうということをよくあらわしている。

## VI. 「かたり」と聞き手

先に「かたり」のカタはカタドリ(象)のカタ、型のカタと同根であり、出来事を模して言葉で相手にその一部始終を聞かせることが原義であると説明した。このことから、そもそも「かたり」は未だ言葉の与えられていない出来事を言葉によってひとつの型にして表現することであったという理解が成り立つであろう。そこで、ここでは、明らかに感じられてはいるが未だ十分には概念化されてはいない感覚(後にフェルトセンス; felt sense と呼ばれる)を象徴化していく過程として記述されたフォーカシング(Focusing; Gendlin, 1964)を、ひとつの「かたり」の生成の過程と見立てて、その様相とそれに対応する聞き方について取り上げる。

Gendlinは、現在この瞬間に生起している体験の流れに注目し、この感情と象徴の相互作用の過程を体験過程と名づけた。そして、この概念を中心に人格変化の理論を展開する中で心理療法による人格変化の過程についての四つの位相からなる段階的なモデルを提示し、これをフォーカシングと呼んだ(Gendlin, 1964)。そのうち第一の位相は、体験過程に焦点を合わせて象徴化していく過程である。続く第二の位相は、象徴化が進みそれまで暗々裏に感じられていたことの意味が明らかになる過程である。そして第三の位相は、その感覚に関連する様々の連想や記憶が一度に押し寄せる過程である。最後に、第四の位相では一通りの過程が終了し、別の感覚に注意を移して、再び第一の位相に戻って新たな過程が始まる

ことになる。

こうした一連の過程は、後に体系的な技法としてのフォーカシングにまとめられた (Gendlin, 1981)。フォーカシングは一人でもできるように工夫された技法であるが、実際にフォーカシングを行うフォーカサーと聞き手のリスナーがペアになって行われる場合が多い。フォーカシング・セッションでは言語化、発話は必須ではなく、フォーカサーはむしろ黙ってフェルトセンスに焦点を合わせる時間の方が多くくらいである (内田, 2002)。これに対してリスナーは基本的に絶対傾聴 (Gendlin, 1981)、すなわち相手の言ったことのポイントのひとつひとつを伝え返すことでフォーカサーに理解を伝え、フォーカサーがフェルトセンスを象徴化する過程を援助する。このとき解釈や明確化などは不要であって、リスナーはひたすらにフォーカサーの過程を尊重し、フォーカサーが自分のペースで表現するのを待つような聞き手に徹するのである。

ところで、先述の四つの位相からなるモデルは、起承転結を典型とするような一定の順序とまとまりを有することや、繰り返し語り継がれるといった「かたり」の特徴に符合するようで興味深い。繰り返し語り継がれる「かたり」もはじめから存在していたわけではなく、その生成の歴史があるはずである。そして、端緒においては現在まさに感じられてはいるものの未だ十分には概念化されていない暗々裏の感覚であったものが、象徴化の過程、すなわちカタドリの過程が進むにつれてその意味が明らかになり、やがて関連する連想や記憶が次々と想起されて相互に結びついて意味的連関をなし、現在と過去とが結びついてある筋書きが獲得、了解されるという一連の流れ、しかもそれが繰り返されるというフォーカシングの過程を、「かたり」の生成と語り継ぎの過程に重ねて理解することが出来よう。さらに、「かたり」を聞く際には合いの手を入れることが作法として厳重に守られていたことは既に述べたが、フォーカシングの過程を推進する絶対傾聴は、まさに合いの手とも呼べるものであって、「かたり」を極力邪魔しないように注意しつつも積極的に関与していくという聞き手の態度にも共通する性格が見受けられる。

ところで、ここではフォーカシングの一連の過程およびその中で生起する発話行為を、カタドリを特徴とする「かたり」として記述したが、一方でフォーカシングにおける発話行為を「はなし」として説明するものもある。大石 (1988) は、発声によって、表出された言葉とフェルトセンスの差異が明確になり、これを契機にフェルトセンスの意味が捉え直されるという側面のあることを指摘し、フォーカシング体験を「感じる」という内への行為と、内的体験を「話す」、あるいは身体の外へと言葉を「放す」外への行為という二つの動きのサイクルとし

てモデル化した。この指摘を踏まえるならば、フォーカシングにおける発話行為を、内への行為によってかたどられたフェルトセンスが外に向けてはなされる、と表現することもできる。このことは、部分と全体のどちらの視点に立つか、あるいはどの特徴を強調するかによって「はなし」とも「かたり」とも表現できるような曖昧な部分、重複する部分があるということ、両者の間にはっきりとした線引きをして区別することはできないということを示していよう。

さて、前節から、自由さという点で「はなし」に対応させて自由連想法を、カタドリという点で「かたり」に対応させてフォーカシングを取り上げて、それぞれにおいて生起する発話行為と聞き手の関与について検討した。ここではその一面を単純化して取り上げたに過ぎないが、それでも双方ともに Table 1 に示したような形で「はなし」と「かたり」に単純に対応させることができるのではなく、「はなし」と「かたり」が深くかかわりあう様子が示された。また、今回その一端に触れたように、心理療法場面で生起する発話行為は、現在と過去とが入り混じり、入れ替わり、形を変えて繰り返されるといった複雑な様相を呈するものであって、これに対する聞き手にも積極的な関与と特殊な聞き方が要求される。このような複雑な相互作用を理解するために、そしてまた適切な合いの手を入れて対話を促進するためにも、聞き手が発話行為の諸相について十分に意識しておくことは重要である。

## Ⅶ. さいごに

本稿では、発話行為の諸相を整理するとともに、そのなかでも「はなし」や「かたり」といった発話行為が心理臨床場面でどのように立ち現れ、聞かれるのかということの一例として自由連想法とフォーカシングをあげて考察を試みた。既に述べたとおり、「はなし」や「かたり」をはじめとする発話行為の諸相を聞き手がどのように認識しているかということは、聞き手の態度に影響する。真剣な「かたり」であっても、真剣に語れば語るほど別の何かを隠し、「騙る」ことにもなるのである。反対に、「戯言」のような「はなし」であっても、話せば話すほどに本当のことが漏れ出てしまうこともある。聞き手としての自分が発話行為の諸相をどのように認識しているかということを知り、「はなし」や「かたり」をはじめとする発話行為の差異と共通性について意識しておくことが、対話の中で行き交う言葉について、あるいは言葉として結実する以前の「しじま」や「ならく」を含めた対話の場についてのセンスを鋭敏にし、合いの手をより適切で良質のものにすることにつながるであろう。



## 謝 辞

本論文の作成にあたり、ご指導いただきました九州大学大学院人間環境学研究院教授野島一彦先生、同教授田嶋誠一先生に深謝いたします。また、貴重なご意見をいただきました九州大学大学院人間環境学府の安田郁さんに深謝いたします。

## 引用文献

- 土居健郎 1992 新訂 方法としての面接 臨床家のために 医学書院
- フロイト S. 小此木啓吾 (訳) 1983 分析医に対する分析治療上の注意 フロイト著作集9 人文書院 (Freud, S. 1912 Recommendations to Physicians Practising Psychoanalysis. Standard Edition, vol.12.)
- ジェンドリン E.T. 村瀬孝雄 (訳編) 1981 人格変化の一理論 体験過程と心理療法 ナツメ社 Pp.39-157. (Gendlin, E.T. 1964 A Theory of personality change. In Worchel, P. and Byrne, D.(Eds.), Personality Change. New York: Jhon Wiley & Sons, 100-148.)
- ジェンドリン E.T. 村山正治・都留春夫・村瀬孝雄 (訳) 1982 フォーカシング 福村出版 (Gendlin, E.T. 1981 Focusing. New York: Bantam Books)
- 星野 命 1970 事例研究の意義と諸問題 片口安史・星野 命・岡部祥平編 ロールシャッハ法による事例研究 誠信書房 Pp.583-595.
- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田 晃・三原幸久 (編) 1977 日本昔話事典 弘文堂
- 河合隼雄 1986 心理療法論考 新曜社
- 北山 修 1983 国語を共有することと解釈—国語発想論的解釈— 精神分析研究, 27 (4), 211-214.
- 北山 修 2003 治療記録のための覚え書き—直接話法と間接話法の使い分け— 精神分析研究, 47 (2), 133-139.
- 松田 修 1978 西鶴論の前提 市古貞次 (監修) 松田 修・堤 精二 (編) 国文学解釈と鑑賞別冊 講座日本文学 西鶴 (上) 至文堂 Pp.9-25.
- メルロ-ポンティ M. 竹内芳郎・小木貞孝 (訳) 1967 知覚の現象学 I みすず書房 (Merleau- Ponty, M. 1945 La Phenomenologie de la Perception. Paris: Gallimard.)
- 三谷栄一 1960 日本文学の民俗学的研究 有精堂
- 新村 出 (編) 1955 広辞苑 第5版 岩波書店
- 大石英史 1988 “行為”の次元からみたフォーカシング論—そのモデル化の試み— 人間性心理学研究, 6, 49-58.
- 大野 晋・佐竹昭広・前田金五郎 (編) 1974 岩波古語辞典 岩波書店
- 坂部 恵 1989 ベルソナの詩学—かたり ふるまい ころろ 岩波書店
- 下山晴彦 2000 事例研究 下山晴彦 (編著) 臨床心理学研究の技法 福村出版 86-92.
- 内田和夫 2002 フォーカシングにおける沈黙と語り—体験過程スケールを用いて— 人間性心理学研究, 20 (2), 101-111.